

## 大学生のソーシャルスキルと家族機能および抑うつとの関連

江口 慧<sup>1), 2)</sup> 山口 一<sup>2)</sup> 種市 康太郎<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> テラコヤキッズ新宿本教室

<sup>2)</sup> 桜美林大学大学院心理学研究科

## The Relations among Social Skills, Family Function, and Depression in Undergraduate Students

Aki EGUCHI<sup>1), 2)</sup>, Hajime YAMAGUCHI<sup>2)</sup>, Kotaro TANEICHI<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> Terakoya Kids Shinjuku Honkyousitu

<sup>2)</sup> J.F.Oberlin University Graduate School of Psychology

**キーワード:** ソーシャルスキル, 家族機能, 抑うつ

**抄録:** 思春期・青年期は抑うつが引き起こされやすい時期といわれている。抑うつの予防因子としては、ソーシャルスキルや家族機能が知られている。そこで本研究は、青年期にある18歳から24歳までの男女大学生を対象とし、ソーシャルスキルと家族機能および抑うつとの関連を検討することとした。

質問紙は500部配布し465部を回収した(回収率93.0%)。回収されたものから欠損値等のあるものを除き368部を分析対象とした(有効回答率79.1%)。調査に用いた質問紙は、①フェイスシート(年齢、性別、学年)、②成人用ソーシャルスキル自己評定尺度(相川・藤田, 2005)、③家族特性評価尺度(杭瀬・三澤, 2003)のうち情緒的結合因子と円満因子の12項目、④Center for Epidemiologic Studies Depression Scale 日本語版(以下CES-D: 島・鹿野・北村・浅井, 1985)であった。

家族特性評価尺度、成人用ソーシャルスキル自己評定尺度、CES-Dの3尺度について、*t*検定により性差を検定したところ、ソーシャルスキル自己評定尺度の下位尺度である「記号化」、家族特性評価尺度の下位尺度である「情緒的結合因子」は、女性は男性よりも有意に高い値を示したが他は男女差はみられなかった。相関分析では、家族特性評価尺度の下位尺度である「円満因子」、「情緒的結合因子」とCES-Dとに弱い負の相関が示された。また、成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の下位尺度である「関係開始」、「主張性」、「関係維持」、「記号化」とCES-Dとは弱い負の相関が示された。

ソーシャルスキルが家族機能を介して抑うつに至るパスが存在することを仮定して共分散構造分析を行ったところ、「成人用ソーシャルスキル自己評価尺度」からは「家族機能評価尺度」へ有意な正のパス、CES-Dには有意な負のパスがあった。また、「家族機能評価尺度」からCES-Dには有意な負のパスがあった。以上から「成人用ソーシャルスキル自己評価尺度」は直接的にCES-Dとパスがあることに加え、「家族特性評価尺度」を経由してCES-Dと関連するパスが存在することが示された。今回の結果からは、ソーシャルスキルトレーニング等によりソーシャルスキルが高まると、その結果として抑うつが低減する可能性があると考えられた。また、その過程の中で家族関係の改善が想定された。

## 1. はじめに

本研究は大学生からみた家族機能とソーシャルスキルに焦点を当て、それらと抑うつとの関連について探究するものである。青年期は親から心理的に分離し、一個の個体となる（馬場・永井，1997）。Erikson（1950，仁科訳，1977）は、思春期の発達課題として自我同一性を想定した。自我同一性は、他者と異なる自分とは何者であるかを明確に持つことである。また思春期は、今まで義務教育だった環境から進路について何がしたいのか、何をすればよいのか考える必要が出てくる時期である（馬場・永井，1997）。そして青年期は、自分から卒を選ぶ準備を始める時期である（馬場・永井，1997）。

思春期・青年期は抑うつ状態を引き起こしやすいことが知られている。坂本・丹野・大野（2005）の10歳以上を対象に抑うつ状態を測定するCenter for Epidemiologic Studies Depression Scale 日本語版（以下CES-Dと示す）を用いた調査によると、15歳から24歳の年代は抑うつ得点が他の年代より高い。その背景として、坂本他（2005）は、青年期は環境的な変化が多くストレスを受けやすいことを指摘している。また、大学生の抑うつの発生には家族との別居も関連があることを指摘している。さらに、価値観が多様化した現代社会では、就職に対する考えや労働環境の変化から、将来の生き方の選択や決定に葛藤が生じる（毛利・敷川・竹村・引網・成瀬，2004）。青年期は自分自身の主体的な価値観を形成し、どのような役割を取るのか自分自身を模索しなければならないというストレスがある（毛利他，2004）。

この抑うつ状態がどの要因から生じるかを調べることは、青年期の危機状態を軽減する上で重要である。抑うつ状態の背景要因には、さまざまなものが考えられる。例えば、石川・戸ヶ崎・佐藤・佐藤（2006）は海外の抑うつ予防プログラムをまとめているが、その中で抑うつのリスクファクターは、個人的要因、認知的要因、社会的要因、家族の要因、外的な出来事の要因の5つに分類できるとしている。個人的要因には、遺伝的脆弱性や他の障害の要因、以前の抑うつエピソード、不安障害の存在、慢性的な病気が挙げられる。認知的要因には、ネガティブな帰属スタイル、認知の誤り、ネガティブな自己知覚が挙げられる。社会的要因には、社会的スキル、社会的問題解決、社会的なサポートが挙げられる。家族の要因には、親の感情障害、親の養育態度、家族関係、夫婦関係が挙げられる。最後に、外的な出来事の要因として、ネガティブなライフイベントや日常生活で生じる些細で不快な苛立事が挙げられている。外的な要因の中でも、家族

や友人関係におけるトラブルなどの心理的なストレス要因が抑うつと関連していることが他の研究からも明らかにされている (Eley, & Stevenson, 2000; Xiaoja, Lorenz, Conger, Elder, & Simons, 1994)。

一方、抑うつに対する予防因子の研究も行われている。その一つが、ソーシャルスキル (social skills) である。ソーシャルスキルとは、具体的な対人場面で、学習によって獲得され適切かつ効果的に反応をするために用いられる言語的・非言語的な対人行動と、適切かつ効果的に反応するための認知過程の両方を包括する概念である (相川・津村, 1996)。相川・藤田 (2005) によれば、ソーシャルスキル尺度は二つのタイプに分かれる。ENDE1 (堀毛, 1991) や ENDE2 (堀毛, 1994)、ノンバーバルスキル尺度 (和田, 1992) 等の尺度は、対人場面におけるコミュニケーション過程を想定し、個人が相手に自らの意思を伝えるために行う、「記号化」に関わるスキル、個人が相手の意思を受け取るために行う「読解」に関わるスキル、そしてコミュニケーション過程における個人内に生じる「感情統制」に関するスキルを含む、コミュニケーション・スキルを測るタイプである (相川・藤田, 2005)。もう一つのタイプは、KiSS-18 (菊池, 1998) などのように、ソーシャルスキルをどの程度身につけているかを測定する尺度である。成人用ソーシャル自己評定尺度は、2つの側面を同時に測定できる。1つは、対人場面でのコミュニケーション過程を想定し、個人から相手へ発する表出や感情統制といったコミュニケーション・スキルを測るタイプであり、もう一つは、関係開始や関係維持といった対人場面で実際に必要とされる対人スキルの2つで構成されている尺度である (相川・藤田, 2005)。

ソーシャルスキルの性差については研究により異なる。大対 (2015) によると、成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の下位尺度である「主張性」と「感情統制」、ソーシャルスキルの総得点は、男性が女性よりも高く「記号化」は女性が男性よりも高かった。柴橋 (2001) は、青年期の友人関係における自己表明と他者表明を測る尺度を作成し、女子は男子よりも喜びの表明を多く行い、男子は女子よりも不満・欲求の表明を多く行うことを示した。一方、村木 (2016) による研究では、成人用ソーシャルスキル自己評定尺度において性差は認められていない。このように、成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の性差については先行研究により結果が異なっているため、今回、成人用ソーシャルスキル自己評定尺度について性差の検討を行う。

なお、根岸・山口 (2017) は、友人や家族など親しい人との間柄では、関係を維持していくために、自分の意見を譲る方略や葛藤自体を回避する方略が選択されやすいことを指摘している。このことから、友人関係からソーシャルサポートを受けている人は家族との関係においても、ソーシャルサポートを得られやすい関係を形成していると考えられる。

もう一つの抑うつに対する予防因子として、家族機能が考えられる。家庭には、人間関係のトラブルが抑うつに与える影響を抑える機能があると考えられている。家族関係が良好であれば、家族に自分の弱さをさらけ出すことができ、家族が信頼し、安心できる存在となるため、抑うつを低減する効果がある (杭瀬・三澤, 2003)。一方、思春期・青年期の段階にある子どもが、家族機能が悪いと評価している場合は、心身症が多く抑うつ的であることが明らかになっている (増田・山中・武井・平川・志村・古賀・鄭, 2004; 西出・夏野, 1997)。

家族機能を評価する既存の尺度として、FAD (Family Assessment Device) がある。FADには、Epstein, Baldwin & Bishop (1983) によって開発され、佐伯・飛鳥井・三宅・箕口・山脇 (1997) によって作成された日本語版がある。これは、7つの下位尺度、全60項目からなっている。しかし、アメリカと日本では家族の機能が異なる可能性がある。増田・加藤 (1969) は、アメリカの親子関係において、独立へのしつけが根本にあり、親と子の間には一定の距離が保たれ、しつけが行われると述べている。一方、田村 (1992) は日本の場合、家を出たとしても、実家との心理的な関係は親密に保たれていると述べている。したがって、家族の特性をみるために、本研究では集団性の強い日本の文化に立脚し作成された杭瀬・三澤 (2003) の家族特性評価尺度を用いる。

水本・山根 (2010) は、女子大学生を対象に、母娘関係を藤田 (2003) が開発した母子密着尺度の愛着因子得点と精神的自立下位尺度得点の段階型クラスター分析を行い、愛着のタイプを分類した。親と精神的に自立をしている「自立型」は、親からの心理的分離が高い「母子疎外型」より、母親からサポートを受けている感覚が高かった。これは、母親との関係において自立をしている女性でも、情緒的繋がりには保ったままであることが考えられる。渡辺 (1997) は、母への「依存・絆」得点の性別・世代別平均の分散分析を行った結果、母と息子との関係とは異なり、高校生から50代に至るまでどの世代でも娘の母への依存が顕著に高く、成人した娘と母の関係においても一貫して持続されていることを示した。加藤・高木 (1980) も女性の場合、中学生より高校生、大学生の方が親への依存が高くなっていることを示した。父親との関係では、娘より息子の方が高校生から30代までに非依存傾向を強めている (渡辺, 1997)。一方、落合・佐藤 (1996) は、中学生から大学院生までの親子関係の変化を調査するために親子関係尺度を作成し、性差を検討した。その結果、大学生の頃になると、親が子と手を切る関係から子が親から信頼・承認されている関係に変化する。子が親から信頼・承認されている関係には、性差がみられなかった。以上、家族機能の性差についても先行研究の結果は様々であるため、本研究でも性差の検討を行う。

## 2. 目的

思春期・青年期は抑うつが引き起こされやすいと言われている。また、抑うつ予防因子としてソーシャルスキルや家族機能が知られている。この両者は関連があることが知られているため、本研究では青年期のある大学生を対象に、ソーシャルスキルと家族機能、抑うつとの関連を明らかにすることを目的とした。その際、ソーシャルスキルが良好な人は、直接的に抑うつが低下することに加え、家族機能も良くなることで抑うつが減少することが考えられるため (Figure1)、共分散構造分析によりこのモデルを検証する。

本研究が目指すことが明らかになれば、大学生が良好なソーシャルスキルを使用することで家族機能が改善し、抑うつを低減させる可能性が明らかになり、ソーシャルスキルトレーニングの有効性を示す根拠となると考えられる。またその中での家族機能が果たす役割が明確になると考える。

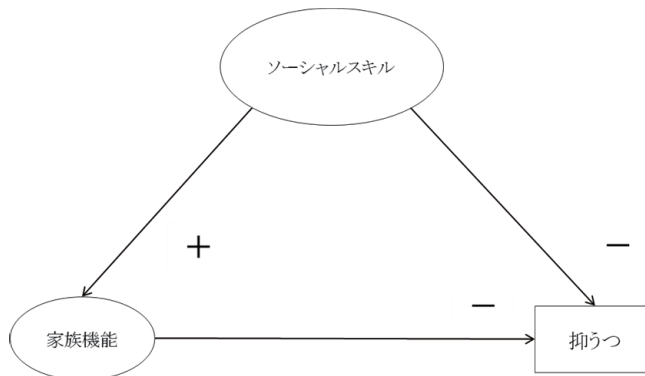


Figure1 予測されるソーシャルスキルから家族機能を媒介して抑うつに至るパス図

### 3. 方法

#### 3-1. 調査対象者

首都圏の2つの大学に在籍する18歳から24歳までの男女学生。

#### 3-2. 調査時期

2016年5月から6月。

#### 3-3. 調査方法

本調査は、桜美林大学研究倫理委員会の承認を得て実施された（受付番号15056）。

調査は、まず、A大学とB大学で教えている教員に教員宛て調査協力依頼書、承諾書、学生宛て調査協力依頼書、質問紙の文書を携え、文書・口頭にて説明し、調査への承諾書を頂いた。調査の承認を得られた教員の講義終了後時に、対象者に調査協力のお願いと質問紙の文書を一人一部ずつ封筒に入れて配布し、口頭説明を5分程度行った。説明の内容は、調査の趣旨、目的、対象、調査方法、プライバシーの保護また調査拒否の自由、調査を拒否した際にも、成績の評価に関係がないことである。対象者には無記名で回答してもらい、当日または翌週の講義終了後に回収した。

#### 3-4. 質問紙の構成

##### (1) 対象者に関する質問項目（年齢、性別、学年を問う項目）

青年期であることの確認のため、年齢と学年を問うた。また、男女差を検討するために性別においても回答を求めた。

##### (2) 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度（相川・藤田，2005）

ソーシャルスキルを測るために成人用ソーシャルスキル自己評定尺度（相川・藤田，2005）を用いた。この尺度は「関係開始」、「解説」、「感情統制」、「主張性」、「関係維持」、「記号化」の6

因子35項目で構成される。回答は「ほとんどあてはまらない」「あまりあてはまらない」「ややあてはまる」「かなりあてはまる」の4件法であり、それらを順に1点から4点と評価した。信頼性について、「関係維持」の $\alpha = .68$ と若干低いものの、概ね $\alpha = .70$ 以上であり、内的信頼性が確認されている（相川・藤田，2005）。妥当性については、成人用ソーシャルスキル自己評定尺度全体と諸井（1997）の対人不安、工藤・西川（1983）の孤独感と抑うつには負の相関があり、妥当性を有するものと判断されている（相川・藤田，2005）。

### (3) 家族特性評価尺度（杭瀬・三澤，2003）

杭瀬・三澤（2003）による家族特性評価尺度のうち、家族機能の観点から、心理的なつながりに関する「情緒的結合因子」と「円満因子」の2因子12項目を用いた。回答は7件法であり、「あてはまらない」を1点、「あてはまる」を7点と評価した。

杭瀬・三澤（2003）の家族特性評価尺度の「円満因子」「情緒的結合因子」は、FES（Family Environment Scale, 以下FESと示す）の「凝集性」尺度との間に中程度の正の相関関係が認められ、基準関連妥当性が確認されている。

### (4) CES-D（島他，1985）

Center for Epidemiologic Studies Depression Scaleは、世界中で使用されている抑うつを測定する尺度であり、20項目から構成される。本研究では島他（1985）が翻訳した日本語版を用いた。評定は4件法であり、得点が高いほど抑うつ感が強いことを意味する。

## 4. 結果

### 4-1. 基礎統計

#### (1) 分析対象と各尺度の記述統計量

質問紙は500部配布し465部を回収した（回収率93.0%）。回収されたものから欠損値等のあるものを除き368部を分析対象とした（有効回答率79.1%）。内訳は男性143名（38.9%）、女性225名（61.1%）であり、平均年齢は19.7歳（SD = 1.25）であった（Table1）。なお、CES-DのCut-Offポイントである16点以上は、男性は143名（65.0%）、女性は225名（63.0%）であった。各尺度の記述統計量を示す（Table2）。

Table1 男女別人数、平均年齢と標準偏差

|    | 人数  | 平均年齢 | 標準偏差 |
|----|-----|------|------|
| 全体 | 368 | 19.7 | 1.25 |
| 男性 | 143 | 19.7 | 1.38 |
| 女性 | 225 | 19.6 | 1.16 |



Table2 各尺度の記述統計量

|                         | 最小値  | 最大値  | 平均値  | 標準偏差 |
|-------------------------|------|------|------|------|
| 関係開始                    | 1.00 | 3.88 | 2.46 | 0.65 |
| 解読                      | 1.13 | 4.00 | 2.74 | 0.49 |
| 主張性                     | 1.00 | 4.00 | 2.41 | 0.53 |
| 感情統制                    | 1.00 | 4.00 | 2.34 | 0.60 |
| 関係維持                    | 1.75 | 4.00 | 2.95 | 0.45 |
| 記号化                     | 1.00 | 4.00 | 2.81 | 0.60 |
| 成人用ソーシャルスキル<br>自己評定尺度平均 | 1.40 | 3.66 | 2.60 | 0.36 |
| 円満因子                    | 1.00 | 7.00 | 4.92 | 1.58 |
| 情緒的結合因子                 | 1.00 | 7.00 | 4.45 | 1.55 |
| 家族特性評価<br>尺度平均          | 1.00 | 7.00 | 4.68 | 1.51 |
| CES-D                   | 1.0  | 46.0 | 20.0 | 9.79 |

## (2) 各尺度得点の性差

本研究では、家族特性評価尺度、成人用ソーシャルスキル自己評定尺度、CES-Dの3つの尺度について、性差の分析のため、*t*検定を行った (Table3, 4, 5)。その結果、成人用ソーシャルスキル自己評定尺度について、「関係開始」、「解読」、「主張性」、「感情統制」、「関係維持」の5因子では有意差はみられなかった。一方、「記号化」は、女性は男性よりも有意に高い値を示した ( $t=-2.27$ ,  $df=366$ ,  $p<.05$ )。家族特性評価尺度の「円満因子」には有意差はみられなかったが、「情緒的結合因子」には有意差が認められ、女性は男性よりも高い値を示した ( $t=-2.00$ ,  $df=328$ ,  $p<.05$ )。CES-Dについては、男女間に有意差はみられなかった。

Table3 ソーシャルスキル自己評価尺度の男女別比較

|      | 男性       |           | 女性       |           | <i>t</i> 値 |
|------|----------|-----------|----------|-----------|------------|
|      | <i>M</i> | <i>SD</i> | <i>M</i> | <i>SD</i> |            |
| 関係開始 | 2.39     | 0.60      | 2.50     | 0.67      | -1.60      |
| 解読   | 2.76     | 0.49      | 2.72     | 0.49      | 0.77       |
| 主張性  | 2.47     | 0.52      | 2.37     | 0.53      | 1.71       |
| 感情統制 | 2.40     | 0.61      | 2.30     | 0.59      | 1.54       |
| 関係維持 | 2.95     | 0.46      | 2.95     | 0.44      | 0.10       |
| 記号化  | 2.72     | 0.58      | 2.86     | 0.61      | -2.27 *    |

\*  $p < .05$ 

Table4 家族特性評価尺度の男女別比較

|         | 男性       |           | 女性       |           | <i>t</i> 値 |
|---------|----------|-----------|----------|-----------|------------|
|         | <i>M</i> | <i>SD</i> | <i>M</i> | <i>SD</i> |            |
| 円満因子    | 4.72     | 1.51      | 5.04     | 1.60      | -1.90      |
| 情緒的結合因子 | 4.25     | 1.43      | 4.57     | 1.62      | -2.00 *    |

\*  $p < .05$

Table5 CES-Dの男女別比較

|       | 男性   |      | 女性   |      | t値   |
|-------|------|------|------|------|------|
|       | M    | SD   | M    | SD   |      |
| CES-D | 20.2 | 9.56 | 19.8 | 9.96 | 0.35 |

#### 4-2. 各尺度間の相関

成人用ソーシャルスキル自己評定尺度全体と下位6因子家族特性評価尺度全体と下位2因子、CES-Dの合計得点に関連があるのかを明らかにするため、各尺度間のPearsonの相関係数を算出した (Table6)。

まず、成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の下位尺度である「関係開始」、「主張性」、「関係維持」、「記号化」のそれぞれとCES-Dとの間に弱い負の相関が示された (関係開始から順に -.38, -.23, -.23, -.27, いずれも  $p<.01$ )。家族特性評価尺度の下位尺度である「円満因子」、「情緒的結合因子」とCES-Dとの間に弱い負の相関が示された (-.35と -.31, いずれも  $p<.01$ )。

Table 6 尺度得点 (下位尺度, 合計) 間の相関係数

|                           | 関係開始     | 解説       | 主張性      | 感情統制     | 関係維持     | 記号化      | 成人用<br>ソーシャルスキル<br>自己評定尺度 | 円満因子     | 情緒的結合<br>因子 | 家族特性評価<br>尺度平均 |
|---------------------------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|---------------------------|----------|-------------|----------------|
| 関係開始                      |          |          |          |          |          |          |                           |          |             |                |
| 解説                        | 0.36 **  |          |          |          |          |          |                           |          |             |                |
| 主張性                       | 0.47 **  | 0.45 **  |          |          |          |          |                           |          |             |                |
| 感情統制                      | -0.07    | 0.02     | -0.11 *  |          |          |          |                           |          |             |                |
| 関係維持                      | 0.29 **  | 0.43 **  | 0.28 **  | 0.12 *   |          |          |                           |          |             |                |
| 記号化                       | 0.59 **  | 0.36 **  | 0.43 **  | -0.23 ** | 0.35 **  |          |                           |          |             |                |
| 成人用<br>ソーシャルスキル<br>自己評定尺度 | 0.80 **  | 0.73 **  | 0.73 **  | 0.11 *   | 0.57 **  | 0.68 **  |                           |          |             |                |
| 円満因子                      | 0.27 **  | 0.12 *   | 0.10     | 0.10     | 0.26 **  | 0.29 **  | 0.29 **                   |          |             |                |
| 情緒的結合<br>因子               | 0.32 **  | 0.17 **  | 0.20 **  | 0.06     | 0.32 **  | 0.32 **  | 0.36 **                   | 0.87 **  |             |                |
| 家族特性評価<br>尺度平均            | 0.31 **  | 0.15 **  | 0.16 **  | 0.08     | 0.30 **  | 0.31 **  | 0.34 **                   | 0.97 **  | 0.97 **     |                |
| CES-D                     | -0.38 ** | -0.17 ** | -0.23 ** | -0.19 ** | -0.23 ** | -0.27 ** | -0.40 **                  | -0.35 ** | -0.31 **    | -0.34 **       |

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

(N = 368)

#### 4-3. 共分散構造分析による因果モデルの検討

成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の得点が家族機能評定尺度に正の影響、CES-D得点に負の影響があり、家族機能評定尺度がCES-D得点に負の影響があると想定してモデルを作成し、共分散構造分析によるパス解析を行った (Figure2)。

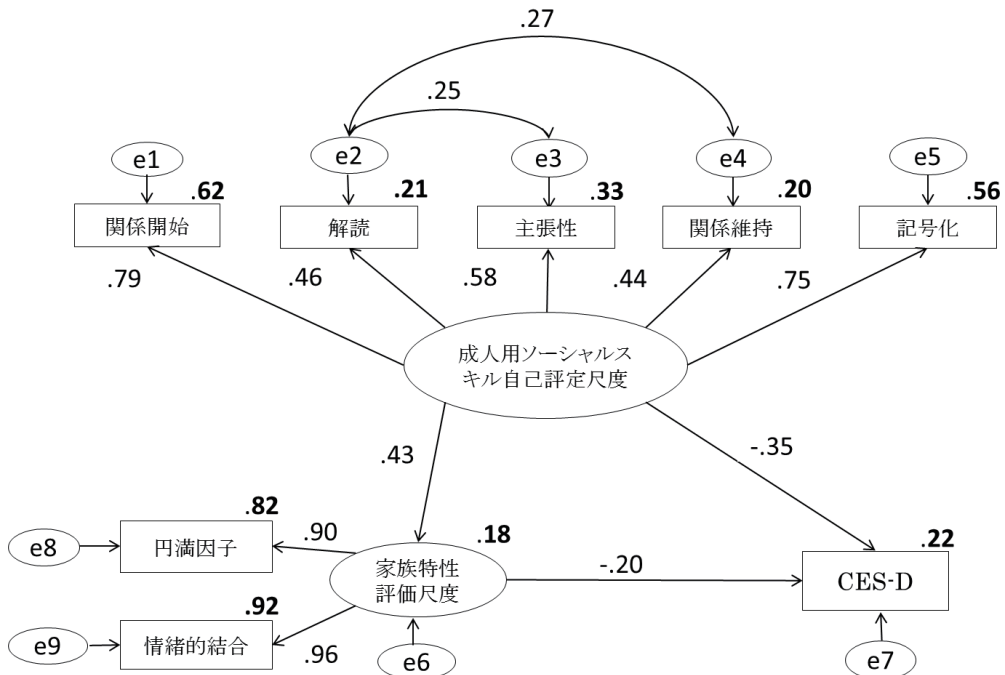
成人用ソーシャルスキル自己評定尺度は、「関係開始」、「解説」、「感情統制」、「主張性」、「関係維持」、「記号化」からなる6因子で構成されるが、今回は共分散構造分析のモデル適合度の結果から、「感情統制」を除いた「関係開始」、「解説」、「主張性」、「記号化」、「感情統制」の5因子を変数として用いた。

適合度指標をみると、 $\chi^2(16) = 49.5$ ,  $p < 0.01$ , CFI=0.97, RMR=0.14, GFI=0.97,



AGFI=0.93, RMSEA=0.076であり, 368名というサンプルの多さから $\chi^2$ は有意となっているが, 十分な適合度と思われる。

観測変数と潜在変数の関係に関しては, 「成人用ソーシャルスキル自己評定尺度」から「家族機能評価尺度」に有意な正のパス (0.43), CES-Dに有意な負のパス (-0.35)が見られた。また, 「家族特性評価尺度」からCES-Dに有意な負のパス (-0.20) がみられた。このモデルのCES-Dの説明率は22%であった。



注) パス係数はいずれも0.1%水準で有意。太字は説明率を示す。

Figure2 ソーシャルスキルから家族機能を介して抑うつに至るパス図

## 5. 考察

### 5-1. 各尺度の性差について

#### (1) 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の性差について

成人用ソーシャルスキル自己評定尺度について,  $t$ 検定を行ったところ, 女性は男性よりも「記号化」の得点が有意に得点が高かった。これは, 先行研究と一致した (大対, 2015; 柴橋, 2001)。

女性が記号化を行い, 友人関係を構築していく背景には, 性別と大学生という年代も関連していることが考えられる。榎本 (1999) や榎本 (2000) によると, 男子高校生と大学生は, 友達

と違う意見でも自分の意見をきちんと伝える傾向が強い。一方、女子高校生と大学生は、気持ちが通っている感情と自分の意見を相手に伝え、お互いの個性を尊重する欲求が高い。また、高校生から大学生となるにつれ友人関係は、他者が入れない親密な関係からお互いの相違点を理解し、お互いに尊重した関係性へと変化する。このように、女性は、友人に対して親しさや気持ちが通っている感情を求め、情緒的であることが分かる（榎本，2000）。

以上のように、女性は大学時代において、相互理解が行われる関係性の中で、感情を素直に表すために「記号化」の得点が高いことが考えられる。同様の関係の取り方が友人関係や家族関係において、みられる可能性が考えられる。

なお、各下位尺度の性差について統一見解にまで至っていないため今後も検討する必要性がある。

## (2) 家族特性評価尺度の性差について

家族特性評価尺度では、女性は男性よりも情緒的結合因子の得点が高かった。情緒的結合因子は、お互いの思いを表現する、内面を表現するなど心理的な繋がりについて尋ねる項目である。例えば、母娘関係を考えると女性同士は言いたいことをお互いに言い合い、心理的距離が近いことが考えられる。このような傾向が女性の得点の高さに表れた可能性が考えられる。

女性の得点が高かった背景に、性別と親子関係の関連が考えられる。親子の関係には、母親と娘、母親と息子、父親と娘、父親と息子の組み合わせにより、依存の傾向に違いがある（加藤・高木，1980；渡辺，1997）。さらに、母親と娘の関係の場合、情緒的繋がりが強いいため、依存傾向が母親と息子より強いことが先行研究から示された（加藤・高木，1980；渡辺，1997）。これらのことから、女性同士は他の異性と比べて心理的繋がりを持ち、お互いの想いを表現することで支え合っていることが考えられる。

## (3) CES-Dの性差について

CES-Dにおける性差は有意ではなかった。CES-Dを開発した島他（1985）の研究では、18歳から58歳までの健康な成人を対象にCES-Dの得点を算出した結果、男性は女性よりも平均得点が有意に高いことが示されている。本研究では比較的若い大学生を対象としたため、調査対象の年代に違いがあり、先行研究と異なる結果が示された可能性が考えられる。

なお、今回のCES-Dの平均得点は男性が20.2、女性が19.8であった。島他（1985）では男性10.0、女性は7.7であり、全体に今回の結果は高値を示した。

CES-DのCut-Offポイントである16点以上の割合で見ても、今回の結果では男性は65.0%、女性は63.0%と先行研究よりも高かった。今野・鈴木・大畠・降旗・高橋・兼板・大井田・内山（2010）の20歳以上の一般成人19,850名を対象とした調査では、16点以上を示した割合は男性は27.2%、女性は31.8%であった。また、年代別では、CES-Dの得点が16点以上の割合では20歳から39歳の若者は30.4%、40歳から59歳の中年は28.5%、60歳以上は29.9%であった。今回の結果は、このような先行研究と比べてもCES-Dの得点が非常に高く、抑うつ状態が男女ともに高かったことが考えられる。

## 5-2. 各尺度間の相関について

「感情統制」を除いた「成人用ソーシャルスキル自己評価尺度」とCES-Dとの相関に関しては、有意な負の相関が示された。この結果は、相川・藤田（2005）の研究と同様の結果であり、先行研究を支持していると考えられる。

「家族特性評価尺度」とCES-Dとは有意な負の相関がみられた。本研究は先行研究の6因子から「円満因子」6項目、「情緒的結合因子」6項目の2因子のみを使用している点が異なるが、先行研究では、思春期・青年期の段階にある子どもが家族機能が悪いと評価している場合は、心身症が多く抑うつ的になる（増田他，2004；西出・夏野，1997）との報告があり、先行研究と一致していると考えられる。

「成人用ソーシャルスキル自己評価尺度」と「家族特性評価尺度」に関しては、有意な正の相関が示された。この結果は、雨宮・松田（2015）の先行研究で、友人関係からのサポートを受けている人と家族からのサポートを受けている人の間に関連を示した結果や、根岸・山口（2017）の先行研究で、友人や家族など親しい人との間柄では、関係を維持していくために、自分の意見を譲る方略や葛藤自体を回避する方略が選択されやすい結果と合致していると考えられる。

## 5-3. 共分散構造分析による因果モデルの検討

本研究では、「成人用ソーシャルスキル自己評価尺度」「家族特性評価尺度」CES-Dの間に因果モデルを想定し、共分散構造分析によるパス解析を行った。

その結果、十分な適合度があるモデルが得られ、そのモデルにおいて「成人用ソーシャルスキル自己評価尺度」にCES-Dへは有意な負のパス、「家族特性評価尺度」からCES-Dにも有意な負のパス、「成人用ソーシャルスキル自己評価尺度」から「家族特性評価尺度」へは有意な正のパスが示された。すなわち、このモデルでは、CES-Dに対する「成人用ソーシャルスキル自己評価尺度」「家族特性評価尺度」の直接効果と、「成人用ソーシャルスキル自己評価尺度」の「家族特性評価尺度」を介した間接効果が示されたと言える。

「家族特性評価尺度」からCES-Dへの直接効果について、思春期・青年期の段階にある子どもが家族機能が悪いと評価している場合は、心身症が多く、抑うつ的になる（増田他2004；西出・夏野，1997）という結果を支持している。また、「成人用ソーシャルスキル」からCES-Dへの効果については、ソーシャルスキルが個人の精神的健康状態を予測する上で関連があることを指摘した結果を支持している（相川・藤田，2005）。さらに、今回このモデルでは、「成人用ソーシャルスキル自己評価尺度」の「家族特性評価尺度」を介した間接効果が示された。ソーシャルスキルが抑うつを改善する過程において、家族機能の改善が一定の役割を果たしていることが示唆されたといえる。

ただし、これらの因果モデルは横断的調査によるデータから作成されたものであるため、因果関係が実証されたとは言えない。抑うつの低減が家族関係の評価を改善させる可能性や、家族関係が良好になることがソーシャルスキルの向上につながる可能性も考えられる。これらの因果の方向性や、共通する第三の変数の可能性などについては、今後、検討が必要であろう。

## 5-4. 今後の課題

### (1) 研究としての課題

本研究では、家族機能について、心理的な繋がりに関する「情緒的結合因子」と「円満因子」のみを採用しCES-Dとの相関を確認したが、杭瀬・三澤（2003）の研究では「情緒的結合因子」と「自立因子」に相関があるなど、家族機能の様々な要因について抑うつとの関連を調べる必要があるかもしれない。

次に、今回は家族との同居の有無は質問していないが、家族機能の尺度項目の一部は、一人暮らしの学生には答えづらい内容であることがわかった。項目内容や、一人暮らしの場合と、同居している場合の家族機能の違いについて検討する必要があるだろう。

さらに今回、CES-Dの得点が他の研究より高得点であった背景については検討できていない。近年の大学生であるのか、今回の対象の特性であるのかなど、より詳細な検討が必要だろう。

今回の研究では、抑うつへの治療のための心理的介入を想定して、ソーシャルスキルと家族機能に焦点をあてた因果モデルを作成した。今後は、家族関係だけでなく、友人関係も検討する必要があると考えられる。例えば、大対（2015）は、ソーシャルスキルの関係開始や関係維持の尺度得点が高いほど、友人関係の満足度が高いことを明らかにしている。大学生にとっては、家族だけでなく友人関係は非常に重要と考えられることから、今後はより統合的なモデルを作成する必要があるだろう。

### (2) 臨床的介入への提言

本研究のモデルにおいては、ソーシャルスキルが高い場合、家族機能が高く、抑うつが低くなることが示された。このことから、ソーシャルスキルトレーニングが家族機能や抑うつを改善する可能性が示唆された。

坂本他（2005）は、健康診断時に抑うつの早期発見を目的としてスクリーニングを実施し、相談機関に繋げることも有効であると述べている。これを踏まえると、大学生において家族機能や抑うつが懸念される際に、予防的介入の一つとしてソーシャルスキルトレーニングの実施を検討することも選択肢の一つと言えるであろう。

また今後は例えば、ソーシャルスキルの下位尺度の得点パターンと家族機能の特徴との関連性の検討など、より具体的に臨床的介入に役立つ研究を計画することが必要であろう。

## 文献

- 相川 充・藤田 正美（2005）. 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成. 東京学芸大学紀要, 56, 87-93.
- 相川 充・津村 俊充（編）（1996）. 社会的スキルと対人関係：自己表現を援助する. 誠信書房.
- 雨宮 千沙都・松田 英子（2015）. 大学生の家族および友人への援助要請行動に被援助志向性、ソーシャルサポート、その他の心理的変数が及ぼす影響. 江戸川大学紀要, 25, 159-165.
- 馬場 禮子・永井 徹（共編）（1997）. ライフサイクルの臨床心理学. 培風館.
- Eley, T. C. & Stevenson, J. (2000). Specific life events and chronic experiences differentially associated with depression and anxiety in young twins. *Journal of abnormal child psychology*, 28 (4), 383-394.

- 榎本 淳子 (1999). 青年期における友人の活動と友人に対する感情の発達変化. 教育心理学研究, 47, 180-190.
- 榎本 淳子 (2000). 青年期の友人関係における欲求と感情・活動との関連. 教育心理学研究, 48, 444-453.
- Epstein, N. B., Baldwin, L. M., & Bishop, D. S. (1983). The McMaster family assessment device. *Journal of marital and family therapy*, 9 (2), 171-180.
- Erikson, E. H. (1950). *Childhood and society*: New York: W. W. Norton & Company (エリクソン, E.H. 仁科弥生 (監訳) (1977). 幼児期と社会 I. みすず書房.)
- 藤田 達雄 (2003). 思春期前の妻の孤独感と母子密着に関する研究. 名古屋短期大学研究紀要, 41, 75-87.
- 堀毛 一也 (1991). 社会的スキルとしての思いやり. 現代のエスプリ, 291, 150-160.
- 堀毛 一也 (1994). 恋愛関係の発展・崩壊と社会的スキル. 実験社会心理学研究, 34, 116-128.
- 石川 信一・戸ヶ崎 泰子・佐藤 正二・佐藤 容子 (2006). 児童青年期に対する抑うつ防止プログラム—現状と課題—. 教育心理学研究, 54, 572-584.
- 加藤 隆勝・高木 秀明 (1980). 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係. 教育心理学研究, 28 (4), 336-340.
- 菊池 章夫 (1998). また／思いやりを科学する一向社会的心理とスキル—. 川島書店.
- 今野 千聖・鈴木 正泰・大寄 公一・降旗 隆二・高橋 栄・兼板 佳孝・大井田 隆・内山 真 (2010). 日本在住一般成人の抑うつ症状と身体愁訴. 日本女性心身医学会雑誌, 15 (2), 228-236.
- 工藤 力・西川 正之 (1983). 孤独感に関する研究 (I) —孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討—. 実験社会心理学研究, 22 (2), 99-108.
- 杭瀬 智子・三澤 咲美 (2003). 日本における家族特性評価尺度の作成. 臨床死生学年報, 8, 30-49.
- 増田 彰則・山中 隆夫・武井 美恵子・平川 忠敏・志村 正子・古賀 靖之・鄭 忠和 (2004). 思春期・青年期の心身症およびその周辺疾患の発症に及ぼす家族機能と養育環境の影響. 心身医学, 44 (5), 370-378.
- 増田 光吉・加藤 正夫 (1969). アメリカの家族と日本の家族核家族時代. 日本放送出版協会.
- 水本 深喜・山根 律子 (2010). 青年期から成人期への移行期の女性における母親との距離の意味：精神的自立・精神的適応との関連から. 発達心理学研究, 12 (3), 254-265.
- 諸井 克英 (1997). セルフモニタリングと対人不安との関係におよぼす認知欲求の効果：女子青年の場合. 人文論集 (静岡大学人文学部), 48 (1), 31-71.
- 毛利 瑞穂・敷川 悟・竹村 祥恵・引綱 純一・成瀬 優知 (2004). A県における学生の精神健康調査. 日本社会精神医学学会雑誌, 13, 41-51.
- 村木 美有 (2016). 日本人向けユーモアスタイル質問紙の作成とユーモアの心理的効用の検討. 桜美林大学 修士論文
- 根岸 優希・山口 一 (2016). 大学生の自己愛類型と対人葛藤方略の関連性について. 桜美林大学心理学研究, 7, 1-16.
- 西出 隆紀・夏野 良司 (1997). 家族システムの認知は子どもの抑鬱感にどのような影響を与えるか. 心理学研究, 45 (4), 456-463.
- 落合 良行・佐藤 有耕 (1996). 親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析. 教育心理学研究, 44 (1), 11-22.
- 大野 久 (1984). 現代青年の充実感に関する一研究—現代日本青年の心情モデルについての検討—. 教育心理学研究, 32 (2), 100-109.
- 大対 香奈子 (2015). 大学生生活充実感を規定する要因の検討. 近畿大学総合社会学部紀要, 4 (1), 47-57.

- 佐伯 俊成・飛鳥井 望・三宅 由子・箕口 雅博・山脇 成人 (1997). Family Assessment Device (FAD) 日本語版の信頼性と妥当性. 精神科診断学, 8 (2), 181-192.
- 坂本 真士・丹野 義彦・大野 裕 (2005). 抑うつ臨床心理学. 東京大学出版会.
- 柴橋 裕子 (2001). 青年期の友人関係における自己表明と他者の表明を望む気持ち. 発達心理学研究, 12 (2), 123-134.
- 島 悟・鹿野 達男・北村 俊則・浅井 晶弘 (1985). 新しい抑うつ性自己評価尺度について. 精神医学, 27, 717-723.
- 田村 毅 (1992). 日本と西洋の家族の比較文化的考察 (第1報): 関連性と分離性. 家族療法研究, 9 (2), 125-135.
- 戸ヶ崎 泰子・坂野 雄二 (1997). 母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応におよぼす影響. 教育心理学研究, 45 (2), 173-182.
- 和田 実 (1992). ノンバーバルおよびソーシャルスキル尺度の改訂. 東京学芸大学紀要第1部門, 教育科学, 43, 123-136.
- 渡邊 恵子 (1997). 青年期から成人期にわたる父母との心理的關係. 母子研究, 18, 23-31.
- Xiaoja G., Lorenz, F. O., Conger, R. D., Elder, G. H., & Simons, R. L. (1994). Trajectories of Stressful Life Events and Depressive Symptoms during Adolescence. *Developmental Psychology*, 30, 467-483.